

レポート・第19回日本李登輝学校台湾研修団

戦後台湾の負の歴史を知った研修

青年部長 杉本 拓朗

去る四月十九日から二十三日にかけて

第十九回日本李登輝学校台湾研修団（略称・李登輝学校研修団、辻井正房団長、前田清文副団長）が開かれまして。今回は総勢三十五名の参加です。

今回の野外研修は、緑島（旧「火烧島」と景美人権博物館という戦後台湾を語る上で避けては通ることができない、負の歴史を知る研修でした。現在の台湾に至るまでだけの悲劇と苦難があったのかを知り、自由と人権の重みを知った研修でした。

第1日・4月19日

初日は台東の娜路彎ホテルに宿泊するため、国内線が飛び立つ台北市の松山空港で合流し、台東空港へ。ホテル

集合組も無事に合流、夕食会へ。

辻井団長・前田副団長の挨拶の後、辻井団長の発声で乾杯。アルコールの力と料理の力で、一同だんだんと打ち解けて話が盛り上がり、台湾への思いを話のネタに盛り上がりました。

第2日・4月20日

二日目は緑島へ船で渡り、バスで緑島人権文化園区に移動。蔡焜燦先生弟の蔡焜霖先生はじめ、王文清先生、陳孟和先生などが出迎えられ、早速、施設で緑島と収容所の歴史のビデオ、各先生方の来歴などを伺いました。

驚くべきことに、先生方は全て無実の罪でこの島に送り込まれ、長期間収容されていた受難者です。王先生に至

っては、勤め先で北京語を教えていた教師が共產党員だったということだけで逮捕され、懲役十五年の判決を受けて収容されたそうです。無実・無関係な人間であっても逮捕し、一方的な裁判で刑務所に送って殺める白色テロ・独裁政権の恐ろしさ。この恐怖の中で台湾人は過ごしてきたわけです。

昼食後、使われていた刑務所（緑島新生訓導處）にご案内いただく。その扉には「光復大陸國土」、門には「忠愛」の文字。無実の台湾人に恐怖と価値観を押し付けた痕跡が未だに生々しく残っています。訓導處の中には、刑務所周辺とその生活を再現した、四〇平方メートル以上はあるかと思われる巨大かつ精巧なジオラマがあり、これを組み立てられた陳孟和先生に、実際の生活を教えていただきました。

受難者たちは、食料生産や、畑を潮風から守るために風避け作りなどの重労働に従事させられ、唯物論や毛沢東を批判し三民主義を学ぶなどの「洗脳

教育」を受け、抵抗したり獄吏にとつて気に食わない者は、酷暑の中、海の近くにあるコンクリート製の建物に水も食料も与えられず閉じ込められ、命を落とした人もいたそうです。

当初、島民は受難者との交流を恐れていたようですが、大学教授や作家、医学博士など多くの知識人が勉強を教えたり治療を施すなどで、島民も交流するようになったそうです。

刑務所を出て人権記念碑がある公園に行きました。ここには受難者の名前と収容時期が記載されています。三回も収容された人や、著名な政治家の名前もありました。

そこで蔡焜霖先生に「絶望的な中で

何が心の支えだったんですか？」と伺うと「故郷の家族への思いと、周りに

立派な大人が多かったから年下の私を助けてくれた。みんなで日本の童謡を歌ったんだ」とのこと。収容者がたくさんいるところには獄吏も迂闊には入れなかったそうで、そのため、みんな

で童謡を歌ったり日本語を使っていたそうです。自由がない緑島で自由に日本語が使え、戒厳令とはいえ自由なはずの外の世界で日本語が自由に使えないとは何と皮肉なことでしょう。

第3日・4月21日

緑島から台東へ引き返し、台東で昼食後に台北へ移動、景美人権文化園区

を訪問しました。ここは警備総司令部の「景美看守所」として政治犯を収容

した監獄で、実際に収監されていた郭振純先生がメイン講師を務め、引き続き緑島の三先生も参加しました。

郭先生のお話のあと「仁愛楼」と呼ばれる施設へ。この中に、政治犯を収容する監獄、面会室、警備室、売店、録音室などがあり、この施設は建物だけでなく、実際に使われていた拷問器具もあり、非常に生々しく、胸が苦しくなる思いでした。

今回の野外研修で講師を務めてくださった先生方はみな受難者でしたが、その思いを日本人である私たちも受け止め、語り継ぐ必要があるのではない



写真左より王文清、陳孟和、蔡焜霖の各先生（緑島人権文化園区 4月20日）



郭振純先生（景美人権博物館 4月21日）



羅福全先生（第1講 4月22日）



許世楷先生（第2講 4月22日）

かと強く思わされました。

第4日・4月22日

この日から始まる座学のため、淡水の李登輝基金会へ移動し、王燕軍秘書長から歓迎の挨拶をいただきました。

第一講は羅福全先生（台湾安保協合理事長）の講義で、中国の領土覇権主義の問題が台湾だけではなく、アジア全体の問題とする安全保障と国際情勢に関する内容でした。

中国は石油を年間一億トン消費し、石油をマラッカ海峡を通じて輸入していることから、マラッカ海峡や周辺国に基地を作り、基地による「真珠の首飾り」を形成しつつあるそうです。また、東南アジア諸国は南沙諸島などで中国との領土問題を抱えているため、台湾はアメリカや日本・アジアと連携して対応してゆくことになり、台湾は孤立していないと強調されました。

第二講は許世楷先生（元台北駐日経済文化代表処代表）の講義で、日本と

台湾の関係に關してです。

東日本大震災の時、台湾は二百億円の義援金や様々な支援を行ってきており、交流協会の世論調査でも台湾人の好きな国の一番が日本で四一%となっていて、親日は台湾にとって外交資源と指摘。また、東日本大震災追悼式典への台湾の正式出席を石破幹事長に交渉して出席できるようになり、中国は抗議の意味で欠席しましたが、これも外交上の駆け引きであり、親日が外交資源となった一例だそうです。

日台間には共通の関係があり、そこには親日という基礎と、その上に安全保障と自由・人権などの価値観を共有していると指摘。また、親日は台湾国内においては対中傾斜に対する警告になると話されました。

第三講は、台湾の国際法上の地位に關して李明峻先生（台湾安保協会秘書長）からの講義です。

まず、国際法で考えられる領土取得に關して、オランダや鄭成功の事例を

用いて説明されました。台湾の国際法上の地位を「カイロ宣言」の当事者であるアメリカやイギリスは法的地位未定と明言し、日本も台湾を法的地位は未定と明言していることを紹介。

また尖閣諸島の領有權に關しても、国際法上、日本に領有權があると明言され、それに関連する台湾問題を論じることが東アジア情勢を論じることになると締め言葉で終了しました。

第四講は、陳南天先生（台湾獨立建國聯盟主席）による台湾關係法と台米關係に關する講義です。

台湾關係法がないと、東アジアのシーレーン上を中国の潜水艦が自由に動くようになり、東アジアの生命線が危機に見舞われるため、同法は日米關係だけでなく、台湾と日本・ベトナム・フィリピン・インドなど周辺諸國に關する法律であると述べ、台湾問題とは國際問題であると説明されました。

最終日・4月23日

最終日、九時十五分からの第五講は蔡焜燦先生（李登輝民主協合理事長）による、ご本人曰く「放談トーク」。

愛日家を自称する先生ですが、その昔、友人に「俺は親日でも愛日でもない懐日だ！」と上手いことを言われたエピソードを紹介。また、さまざまな日本語グループがあることを紹介しつつ「君が代も旗も知ってる認知症」という、ある台湾人の川柳を紹介されました。認知症になっても、日本のことだけは知っているという台湾人の日本人への思いです。また「台湾人は日本人に対して阿つたりしません。いいことはいい悪いことは悪いと言います。これが親日・愛日・懐日のもう一つの顔



李明峻先生（第3講 4月22日）

です」と、台湾人としての思いを開陳していただきました。

そして最後は、李登輝元総統の特別講義です。李登輝先生は、若いころから禅や人の嫌がることをやって自分に打ち克つことを考え、生と死について深く考えて来られたようですが、戦後は唯物論に転向したものの虚しさを覚え、信仰に行き着かれたそうです。

副總統・総統に就任するときも悩んだそうで、牧師と話し、台湾人のために働こうと決意し、民主化に着手されたそうです。しかし、台湾の民主化は並大抵ではなく、大政奉還と同じく軍を人民の軍隊にし、総統職も直接選挙にして民主化を進められたそうです。



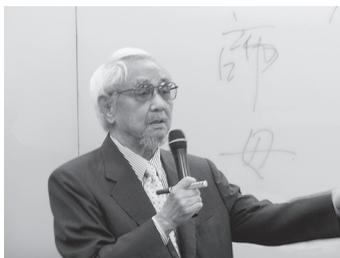
陳南天先生（第4講 4月22日）

私は私ではない私。つまり、私は台湾のためにある私であるという意味と解説され、これに至ったのも自我を超越し、日本的な教育を受けてきたおかげであり、これこそ伝統的な日本精神であると強調されました。

「『ふりつもるみ雪にたへていろかへぬ松ぞを、しき人もかくあれ』という御製を残された昭和天皇も自我を超越しておられたから、マッカーサーも感

激した。この御製をもって皆さんへ送る言葉とさせていただきます」と締められ、全日程が無事終了しました。

李登輝先生をはじめご講義いただいた先生方、李登輝基金会の皆様、今回もお世話になりました。真多謝！



蔡焜燦先生（第5講 4月23日）



李登輝先生（第6講 4月23日）